

通学路の安全性に関する研究

佐賀大学大学院 学生会員 ○浜崎 大輔  
 佐賀大学 非会員 中島 麻美  
 佐賀大学 非会員 正生 直美  
 佐賀大学 正会員 斎藤 健治

1. はじめに

幹線道路の交通渋滞を避けて進入してくる自動車交通によって、本来、歩行者や自動車等の機械化されてない交通手段が優先されるべき生活空間の交通環境が著しく損なわれている。特に、交通状況に対して適切な対応が取れない小学校低学年の児童にとって、狭い道路を高速で走行する自動車は極めて危険な存在である。そこで、通学路において交通弱者である子供達がどのように危険に感じているかをアンケート調査、インタビュー調査で明らかにするとともに、通学路に進入してくる通過交通を把握するためのナンバープレート調査を実施した。

今回、意識調査及び交通実態調査対象地区として佐賀市の日新小学校区の一部を選定した。小学校南部には幹線道路 R207、校門前には一方通行の規制がかけられている長崎街道が通っている。

2. 小学生の意識調査

日新小学校の各学年1クラスを対象に通学路の環境に関するアンケート調査を行った。総回答数は196であり、アンケート項目の内容は「通学中に事故にあったことがあるか、ないか」、「自動車の何を危険と感じるか」、「どこが危険箇所か」等である。調査結果を図1及び図2に示す。

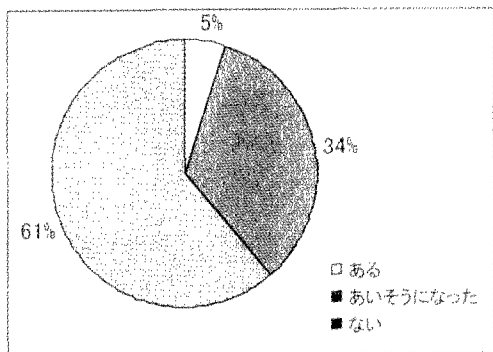


図1 事故にあった小学生の割合

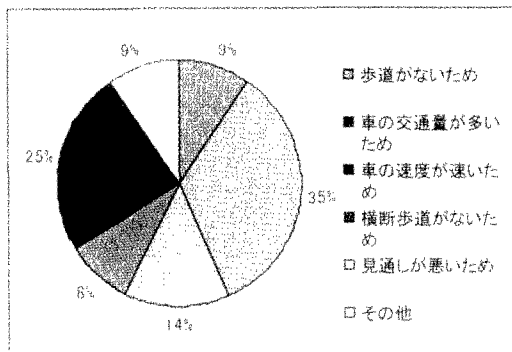


図2 危険要因について

図1より、1~6年生の約40%が通学中に危険な場面に遭遇していることがわかる。また、図2から35%の生徒が、「通学中の自動車の交通量が多い」こと、25%が「見通しが悪い」、14%が「自動車の速度を危険」と感じていることがわかった。学年別の結果を見ると、低学年の生徒の大半が「自動車の速度が速い」と感じていることがわかる。小学校前の長崎街道には30 km/hの速度制限がかかっているが、50%以上の自動車が制限速度を超えて走行している。

また、小学生の通学路の安全性に対する本音を聞き出す目的で、下校中の小学生約80人にインタビュー調査を行った。その結果、大半の生徒が「通学路の自動車の速度が速い」、「道路が狭く、自動車との間隔が狭く危ない」と回答し、アンケート調査とは多少異なる結果が得られた。

3. 交通実態調査

小学校区の一部を対象に午前7:30~8:30の1時間、通過交通の実態を把握するため、ナンバープレート調査を行った。実際には小学校区全部を対象にする必要があるが、範囲が広いため、今回は一番交通量が多いと考えられる一方通行の長崎街道を中心としたネットワーク(図3参照)を作成した。調査方法

